

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ホムダワケ：応神天皇（先生：存在が怪しい） オホサザキ：仁徳天皇：河内王朝の成立

◎吉野の国王（くず：国巢、国栖）土着の民という蔑称。

◎吉野の国王らは、吉野にあるカシの木で横臼を作り、その横臼でおいしい酒を醸み（かみ：古代の酒は蒸した米を唾液と混ぜて発酵させた）、その御酒を大君に差し上げるのじゃが、その時にの、口鼓を打ち、舞いながら歌を歌うのを習いにしておった。この歌はの、吉野の国王らが、貢物を大君に捧げいだす折いつも、今に至るまで声を伸ばして歌う歌なのじゃ。

かしのふに	よくすをつくり	カシの木の生える林で	横臼を作り
よくすに	かみしおほみき	その横臼を使い	かんだうま酒
うまらに	きこしもちおせ	おいしくおいしく	召し上がりたまえ
まろがち		われらの父君よ	

◎このホンダワケの御世に、海部、山部、山守部、伊勢部を定めたのじゃ。解説：この御世には、朝鮮半島からの渡来人に関する伝えが多い、4C 末から 5C 中ば。朝鮮半島との交流が活発になり新たな文化や技術者を受け入れながらヤマト政権が設立に向かう。

◎堤を作るすぐれた技を持つ新羅の人も渡り来たので、タケウチノスクネがその新羅の人を率いて、渡り（輸入）の技を取り入れ、百済の池を作ったのじゃ。

◎百済の国王の、照古王が、牡馬と牝馬（おま・めま）のひとつがいを、アチキシという男に引かせて奉（たてまつ）ってきたのじゃ。このアチキシがわれらの国に根付いての、阿直の史（あちきのふひと）らの祖（おや）になったのじゃ。太刀と大鏡とを奉ってきたの、この時じゃった。

◎百済の国王が遣わしてきた人は、名をワニキシというた。そして、論語十巻と千字文一卷とあわせて十あまり一巻の書を、このワニキシに付けて差し上げてきたのじゃった。また、手技のすぐれた人で、韓の鍛（からのかぬち）名はタクソ、呉の機織り、名はサイソ、この二人も遣わされてきたのじゃ。

◎この、ホムダワケの御世には、外つ国（とつくに）の新羅や百済や漢（から）との交わりが深まったのよのう。

◎新しい技術を持つ者たちが次々渡りきてのう、いろいろなものが造られたのじゃ。

◎ある時、ススコリが、渡りの技で醸んだ御酒を大君に奉ったのじゃ。これは強い酒での、これを飲んだ大君はすっかり酔うてしもうて、心もうきうきと軽うなって歌を歌うたものじゃ。

すすこりが	かみしみきに	ススコリが	醸んだ	酒に
われ	ゑいにけり	われは	酔うたぞ	
ことなぐし	ゑぐしに	憂きこともなき酒	顔もほころぶ酒	
われゑいにけり		われは	酔うたぞ	

◎さて、ホンダワケの大君が亡くなったのちのことじゃ。ここからは先生の独白：古事記では、「天皇、崩（かむあがり）ましし」とだけ載っている。すぐに三人の息子の皇子たちの争いへと展開する。三人の皇子の椅子取り合戦が始まる。オホヤマモリ・オホサザキ・ウヂノワキイラツコの三人。

◎まず長男が亡くなり、難波と宇治に住まいする、二男と三男が残ったが、三男が急死してしまう。残った、オホサザキが大君となる。

◎ホンダワケの大君が亡くなった、次は次男のオホサザキに移れると思ったら、又、前の大君の話が続く。これが古事記かな。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎次男のオホサザキ（仁徳）の話に移れると思ったら、又、前の大君の話が続く。ホンダワケの大君の御世の話じゃ。

◎新羅の国の国王（くにぎみ）の子があつての、名は、アメノヒコポというた。この人が海を渡ってきたのじゃ。その参り来たわけというのは、こうじゃった。

◎播磨風土記では：アメノヒコポは新羅からの渡来神。摂津と播磨の国境付近：神戸市西区から、宍粟郡（しろう）・神崎郡を中心とした、播磨、但馬、出石に散らばっている。但馬を出た後、円山川流域を開拓、亡くなったあとは、出石神社の祭神として祀られている。

◎新羅の国に、一つの沼があつたのじゃ。名は、アグヌマというた。この沼のほとりで、一人の賤しい女（おなご）が昼寝をしておつた。すると、日の光が虹のごとくに輝いたかと思うと、その女の陰（ほと）のあたりを刺したのじゃ。

また、その沼のほとりには、ほかに一人の賤しい男がおつての、女の陰に陽の光が刺すのを見ておつて、それが怪しいことじゃと思うて、それからもいつもその女の振る舞いを見守っておつたのじゃ。

すると、その女は、孕みでもしたのか昼寝をしたときから腹が大きくなってきての、しばらくすると赤い玉を一つ生んだのじゃ。それで、ずっと女を窺い続けておつた賤しい男は、その玉を見て宝の石じゃとでも思うたのかの、うまくだまして奪い取り、いつも布に包んで腰に下げておつた。

この男は、田を山の谷間にもつておつた、それで、田で働く者らに飲み物と食べ物を持っていこうとして牛の背に乗せての、山の谷間に入っていったのじゃった。その時、国王の子のアメノヒコポに逢うたのじゃ。

するとアメノヒコポは、その男に、

「どうして、なんじは飲み物と食いものを牛の背に負わせて、谷に入っていくのだ。なんじは、かならずや、この牛を殺して食おうというのだろう」というて、すぐさまその男を捕らえて、獄囚（ひとや）に入れようとした。それでその男はあわてて、

「ワシは、牛を殺そうとしているのではござらぬ。ただ、田に働く者らに食べ物を届けに行くところでござる。」というた。それでもアメノヒコポは許してはくれないのじゃ。そこで、その腰にいつも下げておつた赤い球をはずして、その国王の子に袖の下として贈つたのじゃった。

差し出された球を見てアメノヒコポはその賤しい男を許し、その玉を持ち来ての、おのれの床のそばに置くと、知らぬ間にうるわしいおとめに変わっておつた。それでアメノヒコポは喜んで、そのおとめをすぐさま抱いての、おのれの妻にしたのじゃった。

おとめは、つねにアメノヒコポによく仕えての、いろいろうまい物を作って、夫に食わせておつた。ところが、国王の子はそれに慣れてしもうて心が驕り高ぶつての、妻を罵ったりするので、ついに女は怒つていうた。

「およそ、わたくしは、あなたの妻などになっている女ではありません。わたくしの祖の国に行かせていただきます」と、そういうやいなや、密かに小舟に乗って、その国を逃げ渡って来ての、難波に留まり住んだのじゃ。これが、難波の比売碁曾（ひめぐそ）の社に座ますアカルヒメという神じゃ。

さて、アメノヒコポはその妻が逃げたことを知つての、すぐさま追いかけて渡ってきて、難波に入ろうとしたところ、渡りの神が波風を起こして入れさせなかつたのじゃ。

アメノヒコポは引き返し、多遅摩（但馬）の国に泊（は）てた、そしてそのまま但馬の国に住みつき、タジマノマタヲの娘と結婚し、代々子が生まれた。妻や子や、またその、妻や子の名前が書かれているが割愛。

◎この時代、朝鮮半島からたくさんの文化人、技術者がやって来ているのだね。やって来たと言ふのが大海を渡って日本に来るのは大変な勇気と体力が要つたのでは。

- ◎安威川河川敷に来ている。ICレコーダーのスイッチを入れ、能書きを言おうとして、ふと白いサギが目に入った。白いサギの小ぶりのもの、成鳥なのか幼鳥なのかわからないやつが、つとつとつと、水の中を前傾姿勢で走っている。餌の小魚を追ってるんだな、じっくり見ようと立ち止まった。シラサギ君、オレの視線を感じ取ってパタパタひらりと飛んで、水の上に着地してまたつとつとつと歩いている。オレが注視した視線を感じたのか、やばいやつ、距離を保たなければと思ったか、さすがに野生の感性、素早く動いた。
- ◎急に寒くなった。昨日までは、半袖シャツの半ズボンで河川敷に来ていたが、今日は長袖シャツを羽織って自転車に乗った。もう秋まっさかりという時期、昨日までは朝晩は少し寒いが、お陽さんが始めると暖かい風、汗のにじり出る暑さの日々だった。台風が次々来て、南方から暖かい風を運んでくるらしく、夏のようなだねと、夏のスタイルで過ごしていた。昨日からは気圧の関係で北の風が冷たい空気を運んできていられるらしい。
- ◎お、今度はムクドリの団体が中洲の砂場にいる。50羽ぐらいか100羽ぐらいか、半分は水浴びでばっしゅばしゅ、半分は砂の上でピーチクビービーと喧しい、というより、「じゃかましい」悪ガキ方言がとぶ。おおめずらしい、これまた立ち止まって見しまった。と、じゃかましいままに、今度は飛び立ち電線に止まるのか・・いや止まらないで、ふわりと上へ、ふわりと下へ、おお絶妙のふわりバランス感覚でモズの団体の乱舞、またまた右へ、次に左へ、乱舞乱舞のあと、河原に降り立つかと思いきや、いや降り立たずに、ふわりの上下したあと、どこかへ飛んでいった。
- ◎今週は毎日のように予定がある、もうジジイになって日々のんびりだったが、連日の用事は久しぶりだ、それでなんだったかその用事はと思い返してみたが、ずっと出てこない。なので、帰ってカレンダーを見ながらのカニングを交えて・・。
- ◎シニアカレッジ講師：もう10年ぐらい続けているかな、年に1回、市の講座に出向いている。今年はちょっと様子が違った、それはオレが変わったのか、向こうが変わったのかどっちなんでしょうね。というのは、以前は、生徒の皆さん、もう一枚二枚と積極的に描きたがったが、今年はほとんどの方が一枚で終わってしまった。絵の具持参の方も2.3人、あとは色えんぴつかクレヨンだった。年齢もオレと同世代ぐらいの高齢化社会のせいかな。
- ◎翌日は箕面病院：毎月ここに、リースの絵を運んでいる。コロナで2年ぐらいストップしていたが、夏前から再開。その前に高槻の山手に100号のキャンバスを運んだ。100号は乗用車では積めないが、オレの車には屋根に簡単ルーフキャリアがあるので、しっかり結べばなんとか運べる。
- ◎その翌日は、知り合いの知り合いが、ホルベインギャラリーで回顧展をやっている、それに付き合いということで行ってきた。日本では特に大阪では幅を利かせていた洋画用の絵の具会社である。先年アメリカに行った時、著名な画家の絵具机にも、ホルベインの画材がいくつか乗っていた。20歳のころはヨーロッパ製の絵具が、「発色が違う いいんだ」と評判だったが日本製の倍近い値が付いていたことが懐かしく思い出される。日本の画材も世界的に通用するようになってきたのかと思ったが、ちょっと筋違いの残念話、昨今、画材屋もどんどん潰れ、えかきも少なくなり、「絵の世界 どうなる」と情けなく思う。
- ◎次の日は歯医者予約、その次の日は高槻の寿永小学校と我がアトリエの教室。その次の日は、阪大病院へ家族の送迎、3分診療と半日の待ち時間である。次が、同窓仲間のZOOMの会、夕方は、寿永小学校の方々と富田付近で一杯飲む話が先程決まった。
- ◎浅川マキが聴きたいと調べてみた。30歳代にレコードまで買って聴いていた。とくに“カモメ”の歌が好きで、いまだにワンフレーズぐらいつぶやける。CDが欲しいなと思い、まず図書館へ。図書館のCDは雑音がすごい、皆さん床や机の上で滑らせて遊んでいるのかと思うほどのりっぱな傷がついている。図書館には浅川マキは置いてなかった。ネットで検索すると“メルカリ”が出てきた。1400円、よし、買った。「かもめ～・・」うなっている。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎三浦祐之著<古事記を旅する>の中で、“太安万侶と本居宣長”の項目がある。興味深い話だ。「おお やはり そうだったか」と納得。YouTube のフェイクニュースとは違うぞと思っている。「やや YouTube の悪口を言っちゃった」いつも見させてもらっているのにゴメンチャイ。SNS ではフェイクニュースも流れる、「これはアカン」と言える目を耳をもってそんなものを弾き飛ばす、きっぱり拒否しなくっちゃ。

◎太朝臣安万侶（おおのあそみのやすまる）奈良公園から奈良教育大の方向、10 キロほどのところに墓がある。1979 年木炭に覆われた奈良時代の木棺が見つかり、銅板に彫られた墓誌が発見された。墓誌は漢文なので翻訳すると、「平城京の左京四條四坊に住んでいた従四位下勲五等の太朝臣安万侶が、養老七年（723 年）七月六日に死去した。そして、同十二月十五日に埋葬した」続日本紀に載っている死亡年と符合するらしい。墓誌では、死亡日が一日ずれているとか、左京四條四坊（今の JR 奈良駅付近）に住んでいたとか、埋葬されるまで五か月もあったなどの新情報があった。墓が発見され、稗田阿礼とは違い（この人は虚構の人なのか？）、実在の人物である。従四位下で、民部卿、今でいえば大臣経験者のりっぱな貴族である

◎安万侶の撰録を裏付ける古事記の序は 8 世紀初めに書かれたもので、古事記の本文の方は、安万侶の時代より前の、7 世紀半ばから後半にまとめられたというのが私の考えである。50 年ぐらいの時間差・・・

◎先生：どう見ても古事記の序の内容が怪しすぎる。安万侶は古事記を編纂していないし、序を書いたのも彼ではなかった。

◎なんと古事記、「稗田阿礼の口承を基に 太安万侶が編纂した」このように教科書で習ってきたが、「これはうそだ」ということらしい、とほほ。

◎本居宣長

◎先生：本居宣長は古事記を現在のような形で存在させるのに大きな功績があった人物として称賛され、一方で、古事記を本来の姿でない方向へ導いてしまった人物として批判の目も向けられている。

◎源氏物語などの“もののあわれ”を論じた近世屈指の国学者であり、古事記の注釈研究を“古事記伝”で 35 年の歳月をかけた。この研究が無ければ、現在の古事記研究は存在しなかったし、古事記という作品が、現在のような形で評価されることもなかったに違いない。

◎宣長の研究は“日本書紀”における“からごころ”漢意を退け日本の古典としての古事記を持ち上げた。そのため“やまごころ”という言葉が象徴されるナショナルアイデンティティを浮き上がらせることとなった。この国学的思想が近代になると政治的に利用され、皇国史観や軍国主義を強化する役割を担うことになり、第一等の“神典”としてもはやされた。

◎戦前の大正時代前後には、日本の教育、国定教科書：尋常小学校読本、には“松坂の一夜”という題で載っていた。当時もっとも高名な国学者であった賀茂真淵が旅の途中で松坂で宿った一夜、助言を乞うた本居宣長が古事記研究を志すことになったという逸話である。

◎三浦祐之先生は、オレと同じ歳、松坂から JR 名松戦で 1 時間ほどの山村生れだとか。

◎オレの中で、賀茂真淵はくひんがしの のにがげろひの たつみえて かへりみすれば つきかたぶきぬ>柿本人麻呂の歌を訳した人として頭の中にある。元歌は漢字が 8 文字だった。

◎オレにとって、古事記を眺めはじめて 2.3 年しか経っていない、まだまだわからないことだらけ。皇国史観や軍国主義の匂いはいやだと思っていたが、あっさりこう言っていただくと、古事記が神話であり、抒情詩であり、歴史がわかる叙事詩でもある、と楽しく読める。オオクニヌシやオホサザキはいつの時代の人なんかな、なんてちょっと知りたい。

- ◎京都トレイルを歩きたいという要望が多く、それじゃ計画してみましようかと、ネットで調べながら、比叡山を通るルートがいいかなと決めた。行ったことがない山、京都トレイルと山の地図とのルートが違う、「ええいなんとかなるだろう すぐそばが都会 山の上には車道もある」てなことでやって来た。京都河原町交差点で、相澤・前川・番匠・三宅・岡村の5人が集合した。3系統のバスで北白川仕伏町へ行く、3系統のバス停はどこだ、うろうろしながらバスに乗った。
- ◎調べたルートでは、北白川天神宮を通過して、北白川大山祇（づみ）神社から瓜生山となっている。降りたバス停あたりを見渡してもそれらしきものはない。「?? 病院のバスがあそこに・・・」病院の横を通り、「これが道か・・・?」「ええい 行ってしまえ」神社があった、道標があった、それ行けえ・・・。
- ◎京都東山のこの付近の山、先ほどまで人家がいっぱいあった都会だったのに、10分ほど進むと山の中の雰囲気になっている。千年以上昔から都のあった地、上の方まで、自前の花崗岩を細工したとはいえ、大きな鳥居や灯籠や祠がいたる所にあり、夜に来ると気持ちの悪い山だね、と想像される。
- ◎2.3日雨が降ったあとの今日、天気は晴れ、樹々の葉の間から見あげると青空に30%ぐらいの白い雲、一本目で暑くなってきたのでヤッケを脱ぎシャツ2枚になった。急に寒くなり厚いかけ布団に毛布まで出して寝ている。夏は2リッターの水が要ったのが嘘のように水が減らない。1.5リッター水を持参したが、1リッター持ち帰った。茶が0.5リッター、スポーツ飲料が1リッターの計1.5リッターだ。
- ◎登山道は雨で花崗岩の砂が流れている、ここ東山は花崗岩の山なのか、石切り場跡、なんて看板もあった。
- ◎杉の植林地帯に行く、茶屋四郎次郎（江戸時代代々続いた豪商）の別荘跡と看板がある開けた場所がある、
- ◎京都トレイルの標識は次々と出てくる、次は瓜生山、となっているがオレの持参の山地図には出ていない。スマホの地図が使えなくなって、こういう都市近郊の小さい山は迷いやすい。道がたくさんあり標識には固有名詞が出ているが、国土地理院地図にはない。「いま オレは どこにいる」これが知りたいのだ。
- ◎歩いているとパッと視界が開け、街々が見える。「おおあれが 宝が池 国際会議場・・・」皆さん知っているだけの名前をいいはる。京都の北の端の街々が眼下に広がる。
- ◎腰かけ休んでいる朽ちた幹に、たった3センチの新芽、針葉樹が芽吹いている。おおこれはすごい、先ほどは“そよご”と木の名前が書かれていた、はじめて聞く名前である。
- ◎鳥居と灯籠のある開けた場所、ここに、「左京都トレイル まっすぐ東海自然歩道」「どうですか」「まっすぐ行きたい」というのでまっすぐ進んだ。帰って地図を調べるもいまだに判然としない不思議。左に谷の流れを見ながら舗装された林道を進んだ。夏の暑さが嘘のように快適な気候、昼なので飯にと暖かい開けた場所を探した。
- ◎おおスゴイ、畳より大きな石の板で囲まれた祠、明治4年と書いてある。まっすぐ行くと車道が見える、その下のトンネルを潜り抜け、おだやかなトラバース道をどんどん進む。
- ◎古い石の道標、右無動寺、弁財天堂、発起人や年号は読めない。
- ◎桜茶屋跡の広場に石の鳥居がある。明治43年京都漆器組合と彫ってある。
- ◎このあたり、道は踏み跡がしっかりしている。延暦寺の坊さんが千年以上、修行と称して歩き回った道、千日回峰がここかどうかは知らないが、昼夜、教を唱えながら修行僧が歩いた道なのかもしれない。
- ◎だんだん道が細くなり、「ええ こんなとこ いくんかな」というところが現れだした。気をつけて、ロープや根っこを掴んで慎重に進むと、立派なお堂が現れた、無動寺だ。
- ◎掃除のお姉さんがいる。「すぐ上が 坂本に行くケーブル」「その上が延暦寺」「そこに 京都市内に降りるバス停があるよ」皆さん、「それに乗って帰ろう」「京都で 一杯 飲もう」無動寺から10分ほど歩くとバス停があり、20分ほど待って乗り込んだ。京都駅まで1時間半、800円也。
- ◎「東福寺駅前に 立ち飲み屋 がある そこに行こう」オレは日本酒を飲み、餃子に土手焼き、酢ゴボウ、酔った、美味かった、8時ころ家に帰り着いた。

- ◎「さあ 明日は比良の定点コースを歩こう」オレはなかなか決断ができないタイプ、前日に言いふらしておいたおかげで出発できた、という笑い話。「一人で 山に入るな 発見が遅れる」よくそう言われる。同道してくれる方がいなくなったので、行きたい登りたい、いや独りじゃ・・・、山はいい。
- ◎北小松の駅、無人駅、IC 感知器と切符回収箱があるだけ。トイレをすませベンチで用意をしていたら、見たような顔の女性、「あれれ MT さん」「えええ」なんと 5.6 年ぶりの再会。中学校の先生が生徒 3 人を連れ、元氣村で山の訓練をするとか、という嬉しい出会い。またまたしばらくして女性、「えええ NY さんじゃ」「ええひょっとして 名前忘れた・・・」やはり 1 年前にこのコースの道中で会い、少し話をした 60 歳ぐらいの女性。まったく偶然に二人の知り合いに会うとは山の不思議。昔、澤山さんと信州の奥深くを歩いていて、「やや あの時の方・・・」という出会いが何度かあった。こういう不思議な出会いがあるんだねえ。
- ◎9:30 楊梅の滝から登り始める。電車の窓から見るに、今日登る釈迦岳のあたり白い雲がかかっている、雲やら霧やら、すぐに飛んでいけようとする時は思っていた。涼峠まで休みなしで行くぞと、上を見上げると青空に白い雲が半分ぐらい。予報では快晴で久しぶり夏日が戻ってくるとなっていた。水は 1.5 リッターで足りるかなと思いつつ、長袖シャツ 1 枚で登っている。えいこらさあ、どっこい、汗が出てきた。
- ◎10:20 涼峠着。北小松駅が標高 100M、ここが 500M、釈迦が 1060M、「今日は 1000M 登るぞ」と勢いをつけてやって来た。10 月中旬、秋まっさかりだけれど樹々の葉はまだまだ緑みどりだ。涼峠直下に、V 字型に花崗岩の砂利が削られた道がある。豪雨の時に水が何度も削ったあと、風が吹き涼しい場所だった。
- ◎12:30 ヤケオ山にやって来た。10 年前、このコースでは、12 時過ぎに釈迦で弁当をかきこんでいた、3 割ほど遅くなってきているが、まだまだ登れる、体力が残っている、安心だ。この尾根道、景色がいい左側が崖になっているところが何か所かあり、下の琵琶湖がまる見え、向こうの鈴鹿もまる見え。木の根っこを掴んで登るよなところも何か所かある、これまたいい。定点コースなんて言っているが考えりゃ 1 年ぶりだ。
- ◎釈迦手前の琵琶湖を見渡せるところで弁当にした。今朝は 6 時起床。昨夜弁当用のご飯を炊き、それを朝飯にも喰い、弁当にも詰め、梅干し胡麻、卵とベーコン入りの野菜炒め、サンドイッチも作った、これは登山口までの間にむしゃむしゃいただいた。霞んでいる、琵琶湖の島と向こう岸の山、鈴鹿山系がぼけている。
- ◎トンボがブイブイ飛んでいる、シオカラトンボか、赤とんぼがまだ赤くならないのか。肉食のトンボは飛びながら蚊のような虫を探しているのかな。飯を終わってカメラを持ってうろうろしていると、「え 小鳥」モズぐらいの大きさ、茶、黒、白のまだら模様、逃げない、人を怖がらない、見たこともない柄、茶系だけれど知っている鳥ではない、感激だ。帰って調べると、イワヒバリと出ている。これもまた嬉しい出会い。
- ◎2:00 釈迦岳にやって来た、のぼれた登れたよかったねえ。このてっぺんは草じゃなく、樹々ぼうぼうの林立、景色は見えない、直下の展望開けたところで飯がいい。ワングル道を通して帰ることにした。
- ◎大津ワングル道、3.4 回登ったことはあるが、下るのは嫌かなと思っていた道、初体験である。このルート、1 時間ぐらい両手を使い、気を使い、緊張の時間である。オレは怖いところは近づかない、危険印は避けて通るということでずっと山を登ってきている。登る時は、ちょい怖いなと思ってもなんとか登れるものだけれど、ここを下るのは嫌だなといつも思う。それでも往復の山、ピストンしかほかに道のない山は気を引き締めて下る。このワングル道は、木の根っこやロープが張ってある、木の根っこや頑丈な枝があれば、怖さは五割減、なんとかスイスイ下ることができた。
- ◎北小松からのこのコース、50 歳代から好きだった、何がいいのかわからなかったが、今は言える、景色がいい、途中の崖があるところは見晴らしがよく、今から登る山も、琵琶湖も、麓の人家も、鈴鹿山系も見える。冬の雪の時は、靴のエッジを聞かせて登っていく、夏は大汗かいて登っていく、若葉が始まるころ、紅葉が始まるころ、これまたいい。
- ◎4:30 頃にイン谷口に降りてきた。祝日にはバスがある、20 分待って乗った。家に帰り着いたのは 6:30 でした。風呂、うどん、日本酒、ぐっすり寝た。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎次男のオホサザキ（仁徳）の話に移れると思ったら、先に続いて又、前の大君の話が続く。ホンダワケの大君の御世の話じゃ。

◎先生独白：さあこれで人の代も半ばを過ぎたかのう。どうじゃ。人の代の語りごとは。大君の繋がりを語るところは飽きもしようが、いろいろな伝えがあって面白いのう。オレ：この独り言もなかなか面白い。

◎ホンダワケの大君の御世の話、前回の続きと言おうか、別の話だが、出石が出てくる。

◎話に入る前の先生の解説を先に：話は、兄弟の対立、競争を語る伝承である。兄弟や姉妹の対立や葛藤を語る神話や伝承は今までもいくつも出てきたように、ひとつの重要なパターンがある。多くの場合は、意地悪で欲張りな兄や姉に対して、優しく美しい弟や妹という構造になっている。これを、末子相続など社会的な習俗と関わらせて論じる場合もあるが、伝承の様式として、幼い弟や妹にいい役割を与えるのだと考えるべきであろう。昔話でも同様である。それにしてもこの話は、兄弟は、同母であるはずなのに、母は弟だけを可愛がっており、ちょっと納得できないような感じもするが、それも伝承の様式なのである。アキヤマとハルヤマという象徴的な名前を持つ兄弟のなかで、兄のアキヤマは、約束を守らないけちんぼで、意地悪な兄として、典型的な悪役を演じさせられている。

◎伊豆志の八前の大神の娘に、名はイツシヲトメという神がいました。麗しい女の神での、八十の男の神たちがこの女神を、妻にしたいと思うていたのじゃが、みな断られてしもうたのじゃ。

◎ここに、二人の神がおった。兄の名はアキヤマ、弟の名はハルヤマ。兄が弟に向かって、「イツシヲトメに 妻問うたが だめだった そなたならできるか」弟が、「できますよ」兄が、「もし できたら 酒造になる 山河の幸を 賭けの品として 差し出そう」といった。

◎それで弟は、兄の言葉を母に申し上げた。すぐさま母は、藤のつるを集めてきて、一夜のうちに、藤つるで衣や袴や沓を作った。また弓矢も藤のつるで作り、イツシヲトメの家に向かわせた。

◎すると、オトメの家に着くや、着物と弓矢に花が咲いての、すっかり花に覆われてしまったのじゃ。花が咲いた弓と矢を厠の戸に掛けておいたの。出てきたオトメはその花を見て心引かれ、手に持って家に入ろうとする時に、弟はオトメの後ろからそのまま家に入って、すぐさまオトメを抱いた。ひとりの子が生まれた。

◎家に帰った弟は、兄に、「わたくしは イツシヲトメを たやすく手に入れました」と伝えた。兄は、弟がオトメを抱いたことをひどく妬んでの、初めにいうた賭けの品を出そうともしなかったの。弟はまた母に泣きついた。母は、「私たち神の世のものは よくよく神の習いを守らなければなりません それを兄のアキヤマは、現（うつ）し世の青人草たちの習いを真似てでもいるのでしょうか 賭けの品物を償おうともしないのは」というたのじゃった。神というのは嘘をつかんということじゃろうのう。

◎そうして、その母は、おのれの子でありながら、弟を苦しめるアキヤマをひどく恨んでの、すぐさま伊豆志河の中州に生えておった一節竹を取ってきての、八つの目のある粗く編んだ竹籠を作り、また、その川の石を拾ってきての、塩をまぶして竹の葉に包み、それを竹で編んだ籠に入れて詛（のろい）の言葉をかけた。

◎この竹の葉が青く繁がごとくに、この竹の葉が萎（しな）え枯れてしまいがごとくに、青く茂り、萎えてしまえ。また、この塩が満ち乾（ふ）るがごとくに、満ちたり乾（ひ）いたりせよ。また、この石が水に沈むがごとくに、沈み臥せってしまえ。

◎こう詛（のろい）をかけての、その籠を、竈からたちのぼる煙の通り道に置いたのじゃ。そのため、その兄は、八年（やとせ）の間干からび萎えて病に沈み、死にそうになってしもうた。

◎兄は苦しみ泣いて、母に許しを請うた。母はすぐに呪いを解いて、兄の体は元に戻った。

- ◎今年初めての信州の山だ、仙丈ヶ岳、南アルプスの女王様だ。北沢峠の長衛小屋テント場は何度も利用させてもらった、バスから降りて10分ほどでテント場がある、ここをベースにして甲斐駒ヶ岳と仙丈ヶ岳に登れる、水は豊富だ、広い、おいに気に入っている。
- ◎何度も言っているが、澤山さん等とここに来ていた昔は、今の仙流荘の近く、戸台に車を止め、河原を一日かけて北沢峠まで重い荷を背負って歩いた。バスが通るようになり、1時間で1200Mをブーブー登ってくれる。
- ◎7:15出発。朝6時ころに目を覚まし、シラフから抜け出しテントの外に出た。外で湯を沸かし朝食の用意とろろろしているうちに、白いものが、「あれれ アラレ」そうこうするうちに雨になりだした。“Yahoo”も“山と高原”も、天気予報は晴れだったのに、とぼやいてみても山の天気は常に怪しいもの、「運が悪いかな尾根道散歩がしたいものだが ま 一二本登って まっこと雨なら 撤退かも」と歩き始めた。
- ◎昨夜は満天の星が出ていた、野菜たっぷりの豚鍋、ビール、焼酎などをいただき、話し笑い8時ころに寝た。
- ◎テント場の長衛小屋から尾根道の二合目合流地点まで、コースタイムで一時間ほどかかる。雨具をつけて歩いていたが、雨が雪に変わってきた。「えええ 雪だ 初雪だ」と嬉しい悲鳴だけれど、「晴れてくれ 陽が出てくれ」の願いは変わらない。
- ◎四合目と書かれた場所を歩いている、有難いことに空は曇っているが、雨やら雪はやんできた。上に行くほど地面が白い、薄っすら積雪風景になってきた。シラビソかな、ダテカンバかな、なんの樹々かな。
- ◎10時頃、大滝の頭五合目を過ぎたあたり、お陽さんがチラリ顔を出した、振り返ると甲斐駒ヶ岳がまる見え、感激の眺望、「やや 冠雪しているぞ」昨夜にでも降ったのか、上の方が白くなった山容が見える。
- ◎ありがたい、ありがたい、お陽さんです、今日は初冠雪かな、あと1時間で小仙丈だ。
- ◎小仙丈を過ぎ、あこがれのアルプスのなだらかな尾根道をルンルン歩いております。空は薄黒く曇った中、青空がまだらにある、風はきつくないのでゆっくり歩ける、冬用のジャケット、手造り防水手袋、毛糸の帽子、寒くはない。ジャケットのポケットには、毛糸の手袋とネックウォーマーが入っているがまだ足りない。霧や雲のかかる合間にちらりチラリまわりの山々の姿が見える、北岳も見えるじゃないですか、樹々の緑の中にオレンジ色の斑点や帯が流れる、黄色というか黄金色というかあれはなんの黄葉かな。目的の仙丈ヶ岳のてっぺんは雲がかかっている、ガレた岩石は花崗岩で白い、その上に雪が積もって、その白さの境目がわからない。
- ◎景色というものは不思議なものだ、霧が出て雲で隠れて、そんな合間に、「おお 見えた なんてきれいな すごいじゃないか」姿を現した山の姿、樹々の緑と黄葉、白い岩肌、そんなこんなにこれほど感動するのは、チラリちらりと見せてくれるからなのか、ずっとずっと見るよりもその素晴らしさが倍増するのかもしれないね、なんて勝手な能書きをつぶやいております。
- ◎仙丈ヶ岳と小仙丈の間、ゆうゆうとした尾根道散歩と思っていたが、四回ぐらい岩場があり、くさりを掴んで、オットト、怖いな、コラサ、この石を超え、この石を掴み、と越えていく。5年前には記憶にも残らない岩場、スイスイ歩いて、よっこら飛び越え、気にもせず歩いていたのだろう。ジジイになり平衡感覚が乏しく、元々無い運動神経がさらに薄くなってきている今は、おっとと、尻をつき、三点確保で、慎重に、焦らずにとゆっくり進んでいる。またまた霧が雲が、周りが何も見えないまま早々にリターンして降りてきました。
- ◎小仙丈の下あたりで以前二度雷鳥を見たが、今日は居ないようだ。ただ黒い鳥が何度か見かける、飛んでいる、ホシガラス君だろう、君にも会いたかったよ、いいねえ、元気だねえ、飛び回われ。
- ◎下の方まで下ってきました、また雨が降ってきた、雨具を出そうか、大丈夫かという程度の小雨だけれど、湿度は100%だ。雨の山は嫌だけれど、こればかりはどうにもならないね。雨のアウトドアはつまらないのでしないぞと決めているが・・・まわりは自然林の樹々、ほとんどが針葉樹、いつも歩いている近畿の山々に比べ、幹の太さは倍ぐらいある、倒木も多い、横たわった樹の長さがすごい、それに白い雪が乗っている。
- ◎小さい雪ダルマを発見。男の子と女の子か、上手く目鼻を付けて、ほっとする暖かさが伝わってくる。

◎7:00 茨木 IC を出発、一路、高速道路を信州に向かっています。2泊3日の計画で仙丈ヶ岳へ行く。

◎「あちゃ〜」なんて親父ギャグを飛ばしながら、快晴の阿智を過ぎ食事にします。じゅうぶんに早く着くだろうと思っていたが、工事渋滞やらで押している。伊那市内で買い物をして、2:20の最終バスに乗りたい。

◎1時間前に仙流荘バス停に到着した。今年から駐車料金が5日間まで1000円になっている。ま、それぐらいは払わなくっちゃ。2万円づつ集めたが、最終的に1.7万円の山行だった。

◎バス停付近の前の川、いつまで工事をするんだ、もう5年も10年もやっているような気がする。暑い、陽が照りつけ、厚着がこたえる暑さだ。「この暑さが 恨めしい」と思えたらいいのになんて冗談を言っていたが、終わってみれば、あの暑さが何だったんだという冬景色だった。ここまで道中の信州風景は、まだまだ樹々の葉は、みどり、緑、紅葉の、「こ」の字もなかった。

◎バスが走り出し、先ほどの昼飯が眠気を誘う。客は我々、相澤・前川・三宅・岡村の四名と、二人の男女、貸し切り状態で揺られる。毎度このバスの運転手さんたちはサービス精神旺盛、面白い解説に心が和む。帰りのバスでわかったことだが、11月15日に最終運航の予定だが、急に冬が来て雪山になってしまうと道路が凍結し、バスと言えども通行不可になる。去年は予定の10日ほど前に運行が終わったそうだ。

◎“鹿の窓” 皆さん見えますか・・・。今まで全くわからなかったが、今回初めて点を発見。あの恐ろしい鋸岳に小さく開いた空間がある、それが車窓からほんの針の穴のように見えるのだ。仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、鋸岳のてっぺんが見える、爽快な景色、樹々が色づき黄色赤色が目立ち始めた。

◎今回の山計画は、大平山荘→馬の背→仙丈小屋→仙丈ヶ岳と、反時計回りを考えていたが、運転手さんの話では、谷筋がもうすでに凍結し装備が無いと通れないという話、これも後ほど、小屋で確認すれば、「やめておけ」ということだった。

◎一日目のテントの中：飲んで喰ってぐっすり寝た。

◎二日目のテントの中：「一日目は 飲み過ぎはだめよ 登れないから」そんな苦言をもらともせず、大いに盛り上がり話し込んだ。今日はお通夜のように静かにカレーを温め、ライスを温め、キュウリとトマトが出てきた。山に登りたかったオレは、昨夜は酒を控え体力を蓄え、ぐっすり寝た。「今日は飲むよ」ビールをいただき、焼酎をいただき、ジンを取った。時間が経って外を見ると、なんと、テントの外は雪が5センチほど積もっている、我々のだけの広いテント場が真っ白である、雪の世界になってしまった

◎帰りのバスを10時発にした。一人で1時間ほど散歩をしてみようと、林道を広河原方面に歩いている。景色を楽しみながらの散歩なのでのろのろきよろきよろである。振り向くと甲斐駒の姿が大きく見える、テント場からでは頭のとっぺんが見えるだけだ。往路のバスからは岩の山だったのに、なんと、白く雪を被った雪山甲斐駒になっている。ちょっとスケッチしてみようと紙を取り出し描いてみた。

◎誰にも言っていなかったが、今回の山、膝に爆弾を抱かえていた。その爆弾も爆発が無く、山から帰った今、なんともないので一安心である。山に登っている間、違和感が来ませんように、ピリッと、クリッと来ませんように、丁寧に上り下りをした。最後まで爆発が無く、これは嬉しい話である。

◎膝に爆弾のものは、一週間前の北小松で、大津ワングル道を下っている時に、ロープが張られた壁があった。そこをそろり下りながら、右足をクルリねじったときに、膝ぼんのあたりがピリリと来た。「あ やったか・・・」と何年か前の悪夢が走った。その時は、取り立山を時計回りに登りながら、岩のところで同じように足をねじった、ねじったときに同様のピリリを感じたが、その翌日も痛み止めと湿布薬を貼り経ヶ岳に登った。それから3年ぐらい、おおいに膝痛に悩まされた。

◎テントをたたみ、パッキングを終え荷を担いたら、重い重い、オレのザックは往復同じ荷だけれど、雪の水をたっぷり吸った荷が重い。10時北沢峠発のバスに乗った。7時ころにアトリエで荷をほどくと、おおいに水を吸ったテントにシラフが出てきた。

◎バスの車窓からの風景が一変していた、緑色、黄色、赤色に白色が加わり素晴らしい感動ものだ。